

# 松山から世界へ そして未来へ

松山出身の俳人・正岡子規と、東京出身の文豪・夏目漱石。同じ年に生まれた二人は、明治という激動の新時代の中で身を立てていこうと、勉学に励み、東京で出会います。

彼らは互いにその才能を認め合い、友情を育み、やがて日本の近代文学に大きな足跡を残すこととなります。

二人が52日間共に暮らした松山には、彼らの足跡、そして創造と革新の志が今も息づいています。多くの俳人、文学者を生み出し、歴史と文化を現代へ継承するこのまちには、「坊っちゃん文学賞」「俳句甲子園」など、新たな「ことばのちから」が満ちあふれています。

二人の生誕150年を迎える2017年、「ことば」と「文学」のまち松山は、新たな一歩を踏み出します。

(「広報まつやま」2017年4月1日号 正岡子規・夏目漱石生誕150年記念特集号 より)

## <記念事業の趣旨>

子規・漱石の生誕150年を記念する取り組みについては、「松山から世界へ そして未来へ」をテーマに、子規と漱石の「出会い」「友情」「別れ」「功績」の紹介を軸とした事業を行いました。

子規と漱石が松山で俳句作りに熱中したこと、漱石が子規との別れを惜しみながらロンドンへ留学し、世界を体験したこと、現代に通じる文学をのこしたことなど、等身大の二人にスポットをあてたエピソードを効果的に盛り込み、松山ならではのストーリー性を持った事業を、年間を通して展開しました。

生誕150年の大きな節目に、日本を代表する二人の文豪が松山でともに暮らし、俳句をはじめとする文学の革新と創造を志したことを、市民の皆さんに実感していただき、松山に一層の愛着や誇りを持ってもらいたいと思います。また、全国から訪れる方々にも、松山であるからこそ体感することができる二人の足跡に触れ、俳句やことばでまちづくりを進める本市の魅力を感じてもらいたいと考えています。



— 松山から世界へ  
そして未来へ —

## <子規・漱石生誕150年PRロゴマーク>

「子規と漱石、二人の出会いが生み出した、世界へ続く道と文学の未来」をテーマにしたデザインです。マークは二人のイニシャルである「S」が寄り添うように向かい合うことで、日本・松山を超えて世界へ続く道と、永く続く文学の未来を表現しています。また、湯気をイメージさせ、湯の街・松山らしさを潜ませました。ロゴタイプは明朝体を用いて落ち着いたクラシックな印象で、「since2017」を付記し、「さらに・未来へ向けて」というメッセージを強調しています。そして、イメージカラーに松山の緑と瀬戸内の青を使い、爽やかで親しみやすい雰囲気仕上げました。



まさおか しき  
**正岡 子規**

慶応3 (1867) 年—明治35 (1902) 年

松山出身。本名は常規。松山中学校に学び、15歳で上京。東京大学予備門（現在の東京大学）に入学するが、21歳で結核と診断される。18歳ごろから句作を始め、やがて俳句研究に没頭。25歳で日本新聞社へ入社し、大学を中退。新聞「日本」に俳句や俳論を次々と発表した。

27歳の時、日清戦争の従軍記者となるが、帰国途中に持病の結核が悪化。須磨での療養を経て帰郷し、大学時代からの親友である夏目漱石の下宿「愚陀佛庵」に52日間同居した。

東京へ戻った後、脊椎カリエスのため病床生活を送りながらも、洋画の「写生」を採り入れた文学論を展開。俳句雑誌「ホトトギス」や新聞「日本」を拠点に、俳句や短歌・文章の革新運動を行い、河東碧梧桐や高浜虚子ら多くの門人を育てるなど、日本の近代文学に大きな足跡を残した。

明治35年9月19日、34歳11ヶ月で亡くなる。その生涯でおよそ24,000の俳句を作った。



なつめ そうせき  
**夏目 漱石**

慶応3 (1867) 年—大正5 (1916) 年

江戸（東京）出身。本名は金之助。俳号は愚陀佛。第一高等中学校（東京大学予備門を改称）時代、詩文の相互批評や寄席の話を通じて正岡子規と友情を深める。28歳の時に英語教師として愛媛県尋常中学校へ赴任。ここで帰郷した子規と52日間同居し、俳句作りに熱中した。

松山の次の赴任先である熊本でも句作に励み、子規派の俳人として活躍。さらに、33歳の時に文部省の命により英国へ留学した。異国の地でも子規との友情は変わらず、手紙を交わしていたが、留学中に子規は帰らぬ人となった。

帰国後、東京帝国大学に勤めながら、高浜虚子の勧めで小説「吾輩は猫である」を発表。職業作家となり、「三四郎」や「こゝろ」などの数々の名作を生み出した。また、漱石の小説「坊っちゃん」の舞台は松山であるといわれ、現在も多くの市民に親しまれている。

大正5年12月9日、49歳で亡くなる。生涯でおよそ2,600句を作ったが、その3割以上が松山での1年間で生まれた。